

# 新生国家エリートの孤独

## タンザニアの作家 E・ケジラハビにおける「ワタン」

小野田風子

### I. はじめに

タンザニアは「アフリカの年」と呼ばれる 1960 年にやや遅れ、1964 年にタンガニーカとザンジバル王国が連合する形で誕生した。イギリスからの平和的独立を勝ち取り、アフリカにおける反植民地主義運動の主要な指導者の一人でもある初代大統領のジュリウス・ニエレレ (Julius Nyerere, 1922 - 1999) は、タンザニアでは「国父」あるいは「先生」と呼ばれ、没後 20 年近くになる現在に至るまで変わらぬ敬意を集めてきた。ニエレレ大統領は特に国家建設に優れていた。彼は複数の民族を統一して国家を創生するためには、すでに国民に広く根付いていたスワヒリ語の方が英語よりも有用であることを正確に認識し、スワヒリ語を国家語に制定した。そして政治、文化、社会のすべての面におけるスワヒリ語の使用の推進とその地位の向上に努め、スワヒリ語を話すタンザニア人としての国民意識の形成を目指した。文学評論家の Kiango & Sengo の以下の言葉が、国民国家の形成におけるスワヒリ語の貢献をよく表している。「この我らの地では、スワヒリ語こそが植民地時代から我らを育て、団結させて自由を導いてくれた育て親なのである。(……) スワヒリ人とはタンザニア人のことであり、スワヒリ語とは疑いなくタンザニア人の言語である」<sup>1</sup>。

タンザニアは今日、アフリカの独立国家の中でも比較的安定した政治を保つことができた数少ない国の一つとされているが、その評判はニエレレの能力だけに起因するわけではない。タンザニアは多数の小規模の民族により構成されていることから、主要な民族同士が利権を争うという状況に陥りにくく、スワヒリ語は特定の民族カラーを帯びず共通語としての地位を早い段階から獲得していたため、国家語として受け入れられやすかった<sup>2</sup>。スワヒリ語という国家建設に適した言語と、ニエレレというカリスマ的リーダー

---

<sup>1</sup> Kiango & Sengo 1972: 10.

<sup>2</sup> タンザニアの民族統一や政治的安定とニエレレの役割については、Coulson 1982、Johnson 2000、Mazrui 2007、Brennan 2012 を参考のこと。

ーが存在したタンザニアという国民国家は、その地の人々にとって、まさに「祖国」と呼べる地になったと思われる。恣意的な国境に基づいた無理のある国民国家の形成が、コンゴやナイジェリアのビアフラでは民族集団に基盤を置く凄惨な内戦を招いたことを考えると、タンザニアの状況は恵まれていた。

本稿の関心はしかし、ニエレレ政権の負の側面でもある社会主義政策、「ウジャマー政策」をめぐる一人のスワヒリ語作家 E・ケジラハビの葛藤にある。ウジャマー政策の一環として、タンザニア全土で農民の強制移住が行われたため、この政策は人に生まれ故郷との関係性を問うものであったと言えるだろう。タンザニアの農村部出身であり、国家建設の責任を担うエリートでもあったケジラハビにとって、この政策はさらに悩ましいものだった。ウジャマー政策は、新生国家建設における最重要課題である一方、彼の故郷の村に悪影響を及ぼしたからである。本稿では、タンザニアという新生国家を祖国と仰ぎながら、他方では、その祖国建設の過程で生まれ故郷が破壊されることも認識していた、二つの Homeland (祖国/故郷)の狭間で葛藤する作家の思いを、彼の作品から跡付けたい。

## II. ウジャマー政策の概要

ニエレレ大統領が社会主義路線への舵切りを表明し、ウジャマー政策の実施を発表したのは、タンザニアの誕生から 3 年後の 1967 年であった。ウジャマー政策の実態は農業政策であり、特に散村状態の村々を集村化してインフラを提供し、農業の機械化や化学肥料の導入により生産性を高めることで、経済的な自立と、大規模農場での共同労働による平等主義の実現を目指した。

ウジャマー政策の精神的支柱となったのは、ニエレレの「アフリカ社会主義」という思想である。彼は、植民地期以前のアフリカについて、互いの尊重、財産の共有、労働の義務という三原則から成り立つ平等で平和な社会であったとし、そのような社会規範をスワヒリ語で「共同体性」を意味する「ウジャマー」(ujamaa) という語で呼び表した。そして植民地化によって失われたアフリカ特有の精神ウジャマーを回復させることで、社会主義は資本主義の発展の結果であるというマルクスの思想とは異なる、アフリカ流の社会主義を実現させることができると論じた<sup>3</sup>。

---

<sup>3</sup> Hyden 1980.

ニエレレはまた、著名なスワヒリ語詩人たちに対し、政策の遂行に文学面から貢献するよう要請し、詩人たちはウジャマーの精神を国民に啓蒙することを目的とした文学者協会を結成することでそれに応えた。この時代に政策を称える目的で紡ぎ出された多くの詩、小説、戯曲は、総称して「ウジャマー文学」とも呼ばれた。このように作家は国家建設を担う一員とされ、国民への政治理念の伝達が彼らの責任とされたのである<sup>4</sup>。

ウジャマー政策の実施当初は、ウジャマー村への移住は個人の選択に任されていた。しかし移住が遅々として進まなかったため、1973年からは一部の都市住民を除くすべての国民に対し、移住が強制されるようになった。移住はしばしば暴力的に行われ、抵抗する人々を強制的にトラックに乗せ、残された家や財産を焼き払うといった方法もとられた。その結果、1976年までに国民の90%に上る1300万人が、国内の5000以上のウジャマー村に住むことになり、ウジャマー政策はアフリカで最大規模の移住政策となった<sup>5</sup>。

ウジャマー政策の功績としては、インフラの確保や教育水準の上昇が挙げられる。実際にこの時期、タンザニアの識字率は40%から90%にまで急上昇したと言われる。一方、その弊害としては、居住や農業に不向きな土地への移住による飢餓や不作、同じ土地を集中的に耕作することによる土地の疲弊、異なる民族が一つの地域に住むことによる衝突、都市の失業者がウジャマー村に強制的に送られたことによる様々なトラブルなどがあり、1974年から1977年の間、ほとんどすべての作物の生産高が低下した<sup>6</sup>。

国父ニエレレが提唱したアフリカ社会主義の具現化であるウジャマー政策は、アフリカ発の思想の実践として、世界的文脈では意義深い挑戦であったが、政策の実施の過程では人々の土地とのつながりの断絶と、家族や民族的つながりの破壊・攪拌が行われたのである。

### III. 二つの Homeland (祖国/故郷)の狭間で

ユーフレイズ・ケジラハビ (Euphrase Kezilahabi) は1944年、現在のタンザニア、当時のイギリス領タンガニーカに位置する、ヴィクトリア湖に浮かぶウケレウェ島 (Ukerewe) のナマゴンド村 (Namagondo) に生まれた。彼はスワヒリ語の実験的小説

---

<sup>4</sup> Blommaert 1999.

<sup>5</sup> Coulson 1982: 249.

<sup>6</sup> Coulson 1982.

と自由詩という二つの新たな分野の確立に関わったことから、スワヒリ語文学界に革新をもたらす代表的な作家の一人として国内外ともに評価されている。彼の幼少期やその頃の村の状況がわかる資料は何もないが、彼はケレウェ民族の王の家系出身であり、村の発展に責任があるゆえに、比較的教育の機会を得やすかったと思われる。20歳でタンザニアの誕生を経験した後、彼はウジャマー政策の実施が宣言された1967年にタンザニア最高峰の大学であるダルエスサラーム大学に進学し、作家としての活動を始めた。

それはまさに国民文学の確立が急がれる国威発揚の時代であった。英語という使用言語の選択肢もあったであろうケジラハビが、この時代にスワヒリ語で文学作品を書き始めたということは、国家の呼びかけに答える愛国的な行為と言える。ケジラハビも評論において、英語などの旧宗主国語ではなくスワヒリ語で執筆することの重要性を語っている<sup>7</sup>。

大衆に向けた文学作品を書く際にそれらの言語（英語、フランス語、ポルトガル語）を用いるのは、エリート主義かつ国際主義を装いながら、作家自身と大衆との心情をやや歪曲することに他ならない。（……）現地の国家語で書かれた新たな本物の文学の確立は、文学の発展という分野における我々（東アフリカ人）のアフリカ全土への偉大なる貢献である。<sup>8</sup>

さらに別の評論では、「我が国の立場である社会主義（Ujamaa）は人類の発展における大きな一歩であると私は考えている」<sup>9</sup>と新生国家が採用した国家建設計画を肯定する。また、ウジャマー文学について、「大衆の精神的向上のためには、一つの解決策と言える」<sup>10</sup>と、その有用性を認めている。彼はプロパガンダ的な詩さえも書いたことがある。

覚醒せよ、アフリカよ 目のかすみを取り払え／アフリカに住みつく 搾取者たちを追い払え／（……） やってこい、良きウジャマーよ 肩を抱き合って、ともに掴み取ろう。<sup>11</sup>

このような、スワヒリ語による創作活動の推進やウジャマー政策の肯定は、まさに独

---

<sup>7</sup> 特に1980年以降に出版された評論に関しては、執筆年と出版年の間に差がある可能性が高く、その内容から、実際には出版年よりも数年前に書かれたと推測するのが妥当である。

<sup>8</sup> Kezilahabi 1980: 76, 括弧内は引用者による。

<sup>9</sup> Kezilahabi 1981: 119.

<sup>10</sup> Kezilahabi 1980: 82, 括弧内は引用者による。

<sup>11</sup> Kezilahabi 1976: 135.

立直後のエリートに求められていた態度であった。ケジラハビ自身も、国民文学の形成や大衆の啓蒙をみずからの責務と考える新生国家のエリートの一人であったことが推測できる。

一方でケジラハビは、作家は民族的背景から書き始めるべきと述べている。

スワヒリ語小説を読んでいて思うのは、最も優れたスワヒリ語の小説家とは、自分の民族を取り巻く状況から書き始めた者たちだということである。国家の主張をもとに書く作家は、新たに作り上げた世界をあまりに理想的に描きすぎ、時に登場人物や設定への深い理解に失敗する。しかしある民族にとっての問題は同時に国家の問題でもあるということを描き出すべきであろう。その問題は、はっきりしない「国家の主張」よりも、芸術作品において明らかにされるものと考えるのが妥当である。<sup>12</sup>

ケジラハビがここで批判の対象にしているのは、同じ評論内では大衆の啓蒙のために有用と述べるウジャマー文学であると思われる。国家の方針を安易に繰り返すのではなく、みずからの民族的背景を緻密に書くことによって初めてタンザニアという国家の現実を捉え得るといふ、彼の文学観を見て取ることができる。

では、故郷ウケレウェの地を舞台に、先述の評論では肯定しているウジャマー政策を扱う時、彼は何を書くのだろうか。最初の二作の小説はウケレウェが舞台となっているが、彼の関心は女子教育の在り方や世代間の権力関係の変化など、新たな価値観の侵入に揺れる現代農村社会をリアリスティックに描くことに向いており、その地におけるウジャマー政策の受容を扱ったテキストは、1974年の一篇の詩と1979年の小説しか存在しない。しかしウケレウェとウジャマー政策との関係性についての彼の考えやその変遷は、二つのテキストからある程度うかがい知ることができる。

詩集『激痛』（1974年）に収められた、ケジラハビの故郷の名前を冠した「ナマゴンド」という詩では、荒廃した村の現状への嘆きと、過去の豊かさへの郷愁の念が表現される。

食べきれず 売り値もつけられず畑で腐っていた／あのおいしいサツマイモはどこへ行った？

---

<sup>12</sup> Kezilahabi 1980: 77.

荒れ狂うと 渡ることができず／静まるまで待たねばならなかった あのナビリ  
川はどこへ行った？／今や涸れ始め 住血吸虫症の温床になるばかり！  
ある一族は崩壊し 子どもたちはどこかへ移住し／それぞれの家庭を築いて 互  
いに疎遠になっていく<sup>13</sup>

詩の後半部分では、村人を後進的な人々とみなし、現代への順応を要求する「現代の  
声」が登場し、ウジャマー政策について言及する。

村人たちよ 現代の声を聞きなさい：／あなた方の星は 消えかかっている。／  
(……)／なぜならあなた方の土は もはや湿ってはおらず／植民者がそこから  
利益を得たのは遠い昔のことだから  
聞きなさい、遣わされてきた学者たちの言うことを／忘れなさい あの昔の歌は  
／よく考えなさい、肥料について、そしてウジャマー村について  
私は生まれ故郷 ナマゴンドを思いだす／私が生まれた村を思って私は泣く／太  
陽と星の下 私が生まれたあの場所を。<sup>14</sup>

村の荒廃を示す要素として挙げられる不作、環境破壊、人々の離散は、すべてウジャ  
マー政策の悪影響と考え得るものである。そのため、「村人よ 現代の声を聞きなさい：」  
という行の後から、「私は生まれ故郷 ナマゴンドを思いだす」という行の前までは、「現  
代の声」の発言内容と捉え<sup>15</sup>、ケジラハビはそれに対し批判的であると考えることができ  
よう。

ウケレウェは比較的早い段階からウジャマー村建設が始まった地域の一つだが<sup>16</sup>、実  
際に何が行われ、どのような影響があったのかはよくわかっていない。ウケレウェのみ  
ならず、ウジャマー政策によって災難に見舞われたタンザニア全土の人々の実際の経験、  
心情などを伝える信頼のおける資料は、その方面における研究の停滞のため不足してい  
る。しかしこの詩は、少なくとも故郷の村の荒廃がウジャマー政策に起因するという認  
識をケジラハビが持っていたことを示している。先述したように、ほとんど同時期に彼  
はウジャマー政策を推奨するプロパガンダ詩を書いていたことから、この段階ではウジ  
ャマー政策への期待感を政治家やエリートたちと共有すると共に、それによって土地や

---

<sup>13</sup> Kezilahabi 1974: 67-68.

<sup>14</sup> Kezilahabi 1974: 68.

<sup>15</sup> ケジラハビの詩では、コロンは会話文の始まりを指すことが多い。

<sup>16</sup> Chambers 1972.

文化を奪われるウケレウエの人々の立場にも共感を抱いていたことがわかる。また、自分の故郷の問題を描写することにより国家の現実を捉え得ると論じたケジラハビにとって、故郷に生きる人々を見舞う問題とは、国家の問題そのものであった。

しかしながら、そのような一般の人々とケジラハビとの距離が決して近くはないことは、「大衆」を啓蒙の対象としてしか見ない彼の記述から明らかである。さらに「ナマゴンド」と同じ詩集に収められた詩「驚愕」(Kumbe)には、自分のエリート意識を自覚し、嫌悪するケジラハビの姿がある。

植民者が私たちに投げ捨てた教育について / (……) 私たちははっきりと理解した / ああ！ だから年寄りたちは / 私たちが本を片手に通りを闊歩するのを / 憐れみながら笑っていたのか / なんてことだ！ 私たちは踊らされていたのか！ / ああ！ ではどうすれば私たちは / 人間の尊厳を取り戻せるのだろうか / 奴らがゴミ捨て場に投げ捨てた代物を / 身にまとうことで失った尊厳を？<sup>17</sup>

「植民者が私たちに投げつけた教育」とは西洋教育を指すと思われる。この詩でケジラハビが衝撃とともに認識するのは、西洋教育をひけらかす愚かなエリートとしての自身の姿である。

同じような認識は、この詩集と同じ年に刊行された小説『うぬぼれ屋』にも見られる。この小説では、主人公の抱くエリート意識と周囲の認識とのずれが滑稽に描かれるが、彼は経歴や境遇がケジラハビ自身に酷似した自伝的な人物なのである。さらに彼は作中で、差別的で利己的なエリートを意味する俗語によって罵られる<sup>18</sup>。自伝的な主人公をウジャマーの平等の精神に反する人物として描くという設定から、自分自身も同じようなエリートであるというケジラハビの自覚がうかがえる。国家への献身に責任を感じつつ、一般の人々の苦しみも理解していたケジラハビは、一方でウジャマーの精神とは相容れないエリート意識によってその人々から自分を引き離し、その矛盾ゆえに自嘲を感じて

<sup>17</sup> Kezilahabi 1974: 37.

<sup>18</sup> 『うぬぼれ屋』の主人公は“naizi”という俗語によって罵られる。“naizi”とは独立後の政策であった「ナショナルイゼーション」、あるいは「アフリカナイゼーション」に由来する語で、独立後、植民者がそれまで占めていた地位を新たに割り当てられたアフリカ人のエリート階級を指す蔑称であり、独立後の社会に残る格差を示す語でもある。“naizi”たちは、ウジャマー政策を推進する側にありながら、その差別意識や利己主義によって、ウジャマーの平等の精神を汚す人々とされた (Topan 2006, Brennan 2012)。

いたのである。

これらの詩が収められている詩集『激痛』には、何らかの不自由さや息苦しさを書き綴った詩がいくつも収められている。狭い部屋に閉じ込められ、助けを求めても誰も来ないという詩、木に縛り付けられ、同じところをぐるぐる回り続けるという詩、そして手の中のナイフに向かって、無為に過ぎていく時間への焦燥感を訴える詩などである。これらの息苦しさを無力感を強く滲ませた詩の数々は、当時のケジラハビが、何を書いても自己への違和感や嫌悪感から逃れられないという膠着状態に陥っていたことを示唆しているようにも思われる。

#### IV. ニエレレ政権への幻滅

1978年、ケジラハビが35歳のとき、彼の作品の政治性に大きな影響を与えたと思われる事件が起こる。議会在議員、大臣、党の代表者の給料の増額と特権の拡大を可決したことを皮切りに、経済状況の悪化やウジャマー政策の事実的な失敗などを抗議するデモがダルエスサラーム大学の学生たちによって3月に行われた。警察による妨害を受けながらも、学生たちは大学から議会まで行進し、抗議文を朗読した。これに対しニエレレはデモに参加した367人の学生を退学処分とし、大学の学生集会を禁じるという処罰を下した<sup>19</sup>。当時ダルエスサラーム大学の教員であったケジラハビは政府の不寛容さにショックを受け、非常に短期間で戯曲『マルクスの半ズボン』を書き上げたという<sup>20</sup>。

大きすぎる「マルクスの半ズボン」を履き、重すぎる「毛沢東のガウン」を羽織ったカペラ大統領が、「平等」という名の国を探す旅に出るが、コルチノイ・ブラウンという名の巨人に惑わされ、似合わない服に疲れ切り挫折する。国内では汚職がはびこり恐怖政治が始まる。最後には政治犯だったムワンガザ<sup>21</sup>・アフリカヌスと呼ばれる人物が率いるクーデターにより座を追われる。

寓意的描写にとどまっているものの、共産主義者の空真似をして平等主義を唱えつつ、東と西の大国にもてあそばされ、単なる独裁政治に終わるかに見えたニエレレや政権への批判という意図は明白である。政権のネガティブな側面を身近な出来事により思い知らされたケジラハビが、この作品で初めて強い政治批判に踏み切ったと考えられる。しか

---

<sup>19</sup> Bulcaen 1997, Kalley et al. 1999.

<sup>20</sup> Bulcaen 1997.

<sup>21</sup> “mwangaza”とはスワヒリ語で「光」と「追求者」の二つの意味がある。



しこの戯曲は、国営出版社からの出版が決まっていたものの、政権からの何らかの圧力により中止されてしまった<sup>22</sup>。この戯曲が日の目を見たのは1999年ダルエスサラーム大学出版からであり、その年にニエレレが亡くなっていることは偶然ではないだろう。

1978年のデモの弾圧と自作の戯曲の出版中止という相次ぐ出来事は、ケジラハビにとってニエレレ政権への幻滅を招いたと思われる。この時点で、ケジラハビはタンザニアという新生国家から完全に心が離れていたと考えるのが妥当であろう。

## V. 『蛇の脱け殻』にみる故郷と国家の否定的描写

『マルクスの半ズボン』執筆のすぐ一年後の1979年に、ケジラハビは小説『蛇の脱け殻』を発表する。これはウケレウェとウジャマー政策の関係性について扱った二つ目のテキストであり、ケジラハビが初めてウジャマー政策そのものをテーマにした小説である。作品の主な舞台は、ウケレウェに位置するとされる架空の村である。その村出身でダルエスサラーム大学を卒業し、中学の教師をしている二人の青年マンボササとマンボレオ<sup>23</sup>が、村でウジャマーの精神を啓蒙するために活動する様子を中心に、強制移住の様相や役人の汚職、政治に振り回される村人たちの行動や心情を描いている。作中の重要人物は、ウケレウェやタンザニア農村部の後進性と、そこに侵入する国家の無慈悲さや利己性といった特質の擬人化の側面が強く、アレゴリー小説とみなし得る。本作では、ケジラハビはもはやウジャマー政策を推進する立場にも、政策の犠牲になる立場にも共感や理解を示してはいない。

まず、国家の無情さの擬人化である二人の青年マンボササとマンボレオであるが、二人は、ウジャマーの伝道者として無知な村人への啓蒙に勤しむが、実は少女への性的暴行や、非国民と決めつけた政治学の教師への暴行で、教師を首になったことを隠している。それらの悪行を知ったマンボササの父親は二人を叱って言う。

「我々親世代はお前たちが国をほつつき歩いて人々を欺くために金を払ったと思っているのか！（……）我々の青年期は植民地政府の農場や鉱山で過ぎてしまっ

<sup>22</sup> Bulcaen 1997.

<sup>23</sup> “mambosasa”とはスワヒリ語で「現代の問題（事柄）」、“mamboleo”とは「今日の問題（事柄）」を意味する。村にウジャマー政策という新しい制度をもたらす二人の青年がこのように名付けられていることから、二人を現実の人間というよりは擬人化された国家として、寓意的な存在として理解する必要があることがわかる。

た。お前たちのようなチャンスなどなかった。それでもそのつらい時期を努力してやり過ごしたのだ。今、お前たちが正しく導いてくれるだろうと期待しているのに、お前たちは人々を怖がらせるだけだ！」<sup>24</sup>

長い叱責の後、父親は二人に村の長と書記の座を提案し、再チャンスを与える。しかし二人には父親の教えや期待は全く通じていない。

「言っただろ！」マンボササが言った。「こういった村では政治的に出世するのは簡単だって。将来、我々を首にした連中に、大臣になって再会できるかもしれないぞ」

「あるいは議員にね」、マンボレオが付け加えた。<sup>25</sup>

二人の青年は、平等主義を唱える反面、村人を蔑視し、みずからの出世のことしか頭にないエリートの象徴として描かれている。

小説の後半、村の資金を着服した二人は村人の信頼を失い選挙で落選し、村長と書記の座を追われる。その後は農作業に協力もせず、ただみずからの不運を呪い、村人からも軽蔑されるほどに墮落する。しかし小説の終盤、二人は政府から重職に就くことを命じられ、勇み立つところで小説は終わる。不道德で利己的な人物こそが出世していくというこのような不条理な現実こそが、当時のケジラハビが認識していた新生国家タンザニアの姿だったのである。

翻って、ウケレウェの後進性を体現するのは、ウジャマー村への移住に抵抗する老人チロンゴである。彼は複数の妻を持ち、男女差別的で乱暴な行動を繰り返す。村人の強制移住を試みた軍隊との戦いで負傷し、病院に入れられたチロンゴは、自分に尽くさない女性の看護師を杖で殴って気絶させ、捨て台詞を吐く。

「私をここに連れてきた連中に伝えろ。私は銃も銃弾も恐れないし、私はウジャマー村を憎むとな！ 誰に殴られたか聞かれたら、斑点模様のライオンだと答えるがいい！」<sup>26</sup>

---

<sup>24</sup> Kezilahabi 1979: 78.

<sup>25</sup> Kezilahabi 1979: 87.

<sup>26</sup> Kezilahabi 1979: 57.

チロンゴのことばからは、彼を粗暴性や、新たな時代の到来とともに捨て去るべき伝統の象徴として描こうとする意図がうかがえる。

さらに、光と闇の比喩の使用にも、同じ意図が働いている。軍隊による村の襲撃を翌日に控えた日、マンボササは村を眺めながらこう考える。「あの森の近くに住む人々は、まだあの森の中の木々のように闇に取り囲まれている。明日我々が彼らを光の中に連れて行くのだ！」<sup>27</sup>。そして翌日になり、村が武力で平定された時、その日は朝から隠れていた太陽が突然現れ、連行された村の反乱者たちは照り付ける太陽の下に数時間放置されるのである。

また、小説のタイトルである「蛇の脱け殻」も村の後進性の強調に関係している。ウジャマー村への移住後、水道が引かれ水浴び場が整備された後も川での水浴びにこだわる頑固なチロンゴは、その最中に近くに大蛇を発見し、恐怖のあまり裸のまま駆け出す。しかしその蛇は脱け殻だったことに気づき、自分を笑うのである。その後の語りは以下のように続く。

これこそがまさにチロンゴと彼のような人々のあり様であった。社会は彼を遠くに置き去りにした。社会はすでに身をくねらせ去ってしまって、もといたところにはいなかった。<sup>28</sup>

実はこの小説に描かれるのは、タンザニア国家とウケレウェの特質の擬人化だけではない。社会主義時代タンザニアの仮想敵としての「西洋」の擬人化とみなし得る、村を教区とするアメリカ人のマデヴ神父<sup>29</sup>も重要人物として登場する。教会に村人を集めてウジャマー政策の批判を続ける神父の存在を問題視したマンボレオとマンボササは、彼の教会に出向く。最初から喧嘩腰の二人に対し神父はウジャマー政策の暴力性を批判する。

「お前たちの政府は独裁だ。マルクスはそんな政府に祝福の手を差し伸べることはない！ お前たちの政府は、読み書きができない人々の考えを尊重しようとも

---

<sup>27</sup> Kezilahabi 1979: 30.

<sup>28</sup> Kezilahabi 1979: 158.

<sup>29</sup> “madevu”とはスワヒリ語で「髭」を意味する“ndevu”に指大化を意味する接頭辞“ma”が付いた形で、村人が神父に付けたニックネームである。

しない。見ろ！ みんな移住を拒んでいるのではないか。彼らは丸太ではない。感情も知性もある人間なのだ。なのになぜ彼らの家を焼く？（……）お前たちは彼らをまるで国家のお荷物のように扱う。せつかく独立したというのに！ 我々がこんな政府のために援助を提供し続けると思うか？」<sup>30</sup>

神父の発言は一理あるように見え、二人は反論することができない。一方で神父は、植民地主義を正当化し、アフリカへの差別を隠そうとしない。

「白人がやってくる前、この国にはありとあらゆる病気が蔓延し、王は残忍で人々は無意味に殺し合い、互いの肉を喰っていた」<sup>31</sup>

「我々は今も搾取をしていないし、植民地期にも搾取をしたことはない。お前たちのように貧しい連中をどうやって搾取しろと言うんだ」<sup>32</sup>

神父は村人たちにウジャマー政策を非難する説教を続けるが、村の既婚女性との性的関係のために信頼を失墜する。

双方の特質の擬人化である重要人物たちは人間的に欠陥のある人物として描かれ、彼らと作者との距離は遠い。さらに国家の発展を謳いつつ、人々の生まれ故郷を破壊するというウジャマー政策の構造にただ一人気付いている西洋人神父も共感可能な人物としては描かれてはいない。作者はもはや政策を推進する国家の主張にも、ウケレウェの人々の苦しみにも共感を示していないだけでなく、そこから逃避するための「西洋」という逃げ道さえも塞がれている。

## VI. 『蛇の脱け殻』と検閲

『蛇の脱け殻』において、ウジャマー政策に賛成する人と反対する人双方が不愉快な人物として描かれる理由は何であろうか。そこには、ウジャマー政策へのあからさまな非難は避けた方がよいという当時の風潮が関係している可能性がある。例えば、本作はウジャマー政策の暴力性を正面から扱っているが、少なくとも同時代のタンザニア人エ

---

<sup>30</sup> Kezilahabi 1979: 70.

<sup>31</sup> Kezilahabi 1979: 68.

<sup>32</sup> Kezilahabi 1979: 70.

リートたちには、本作は反政府的には映らなかったようである。同時期にダルエスサラーム大学に所属していた A. G. Gibbe は、本作におけるいくつかのアレゴリーの効果を解説した評論において、「この本におけるアレゴリーの多くは、社会主義が勝利することを強調している」と述べている<sup>33</sup>。彼は、抵抗する村が軍隊によって襲撃される際、銃声が村人を嘲笑する笑い声に例えられる箇所を取り上げ、「笑い声は、社会主義を遅らせる者、あるいは遅らせようと企む者は誰であれ嘲笑に値し、銃によって嘲笑されることもあり得るということを読者に暗示している」と解釈する。しかしながら、「ここタンザニアに社会主義を建設する際に、銃と銃弾が使用されることをケジラハビが推奨しているかどうかは定かではない」とも付け加えている<sup>34</sup>。

ケジラハビがウジャマー政策と政権に好意的であると印象付ける仕掛けは、本作の最後にも見られる。本作は全体的にリアリズム小説だが、最後の 2 ページでは作者自身とみなし得る全知の語り手が、以下のように本作のまとめを述べる。

そう、このようにしてタンザニアはつくられ、存続し、生きながらえたのだ。

(……) 二つのことだけが明らかだ。第一に、真の革命家とは、元いたところを時代の風に追い出され、前へと駆り立てられた村々に住む人々であるということだ。(……) 二つ目の重要なこと、それは、人類の正義と平等を訴える政府の旗は、永遠に頭上にあるということだ。季節外れの風が吹きすぎ、それを少し押し下げることがあったとしても、それはまた掲げられるだろう。常に、高く。(下線引用者)<sup>35</sup>

下線を引いた一文は、一見政府への称賛を表現しているように見える。しかし、この文章は作中におけるマンボレオの発言と重なっていることから、明らかに皮肉である。以下は、マデヴ神父に論争を挑んだマンボササとマンボレオが逆に言い負かされ、啖呵を切る場面である。

「(……) これが我々の最後の言葉だ。さもないとお前のこの古臭い教会は潰されるか村のブタ小屋になるであろう」

---

<sup>33</sup> Gibbe 1982: 12.

<sup>34</sup> Gibbe 1982: 11.

<sup>35</sup> Kezilahabi 1979: 158-159, 下線は引用者による。

「覚えておけ、マデヴ神父」、マンボレオが付け加えた。「多くの人々の正義と人類の平等を訴える政府の旗は、永遠に頭上にあるだろう」<sup>36</sup>

注意深く読めば皮肉であることは明白とはいえ、このような表現で締めくくった背景には、検閲の存在があると思われる。当時の検閲や言論統制がどの程度であったかを示す信頼できる資料は非常に少なく、関連する出来事や記述から推し量るほかない。例えばケジラハビはある評論において、都市で墮落した登場人物がウジャマー村にたどり着き改心するという「ウジャマー文学」によく見られるストーリーについて、「本心から書く作家もいれば、みずからの原稿の出版を認められるために無理やりそのような結末にする作家もいる」<sup>37</sup>と述べており、検閲の存在を暗示している<sup>38</sup>。同時に、『マルクスの半ズボン』で実際に出版中止という憂き目に遭ったケジラハビが、自身の作品を注意深く読むよう忠告しているかのようでもある。

またケジラハビの場合は、当時幅を利かせていた浅慮な愛国者たちの裏をかくという意図もあったと思われる。ある評論において彼は、読書の習慣が大衆にあまり根付いていない環境では、作家は「透明な（わかりやすい）文学」を書かざるを得ないが、その透明性の中に不透明性を作り出すことで作品の芸術性を高めることができると論じる。さらに、その不透明性は政治的イデオロギーの抑圧に対しても効果を発揮するという。「イデオロギーという障害は作家たちを不透明性という領域に追い込む。この不透明性は、文学的趣味をほとんど持ち合わせていない熱狂的かつ楽観的な革命支持者たちの痼癩に対する防護壁となりうる」<sup>39</sup>。『蛇の脱け殻』の中でもこの不透明性が大いに活用されているのであれば、上述した Gibbe による評論の内容から、ケジラハビの言う防護壁が機能していることがわかる。

検閲のみならず、強制移住の対象となった人々の体験など、社会主義時代のタンザニアで起きた政権にとって都合の悪い事実は、圧倒的な資料不足のため知るのが困難である。この状況を引き起こしているのは、タンザニアに関係する人々の多くが共有してきた、ニエレレ率いるタンザニアへの「偏愛」であると思われる。Ali Mazrui は早くも 1967

---

<sup>36</sup> Kezilahabi 1979: 72.

<sup>37</sup> Kezilahabi 1980: 82.

<sup>38</sup> 検閲については、小野田風子（2018）「社会主義時代のタンザニアにおける検閲 — E・ケジラハビの詩「鼠ども」（Vipanya）の分析をもとに —」『MWENGE』pp. 36-47 に詳述している。

<sup>39</sup> Kezilahabi 1988: 39.

年にこの現象を疑問視し、タンザニアへの根拠の薄い期待や愛着を「タンザニアびいき」(Tanzaphilia)と呼んだ<sup>40</sup>。この背景には、他のアフリカの国々では独立を率いた闘士たちが、独立後次々と恐るべき独裁者に変貌していったという事実がある。アフリカ人やアフリカ人ディアスポラ、そしてアフリカ研究者たちは、比較的政治状況が安定し、独自の理想を掲げて国家建設に勤しむタンザニアとその指導者に対する見方が意識せずとも甘くなり、現在に至るまでその問題点を追求する研究が進まなかったのである<sup>41</sup>。そう考えると、まさに国家建設の真っ只中に国家を否定的に描いたケジラハビは稀有な存在であったことがわかり、周囲の無理解ゆえに彼が孤立したことも想像に難くない。

では、『蛇の脱け殻』において、ウケレウェとタンザニア国家双方が冒険的とも言えるほど否定されるのは、単に作者の政治的態度を曖昧化するためだけなのだろうか。そうであるとしても、故郷を「光と闇」や「蛇の脱け殻」などのアレゴリーを駆使してまで悪し様に描くのはなぜだろうか。

## Ⅶ. 地上には存在しないワタン

ケジラハビがウジャマー政策を声高に推進する時、あるいは過去の故郷の豊かさを感傷的に懐かしむ時、その表現は常に文学的に美化されている。しかし同時に彼は、自己の内面のエリート意識とそれへの嫌悪もまた表現していた。そのような自己への嫌悪感は、彼が文学的センチメンタリズムに没頭することを困難にしたと思われる。ウジャマーの理想を語る時も、故郷の苦しみに共感を表明する時も、それに矛盾する自身のエリート意識を自覚せざるを得なかったケジラハビは、まさに膠着状態にあったと言えるだろう。

やがて国家がニエレレの掲げた理想から離れて行くのに気づいた時、彼はもはやその理想を復唱することもできず、かといってウケレウェの後進性を肯定することもできないと悟ったのではないだろうか。『蛇の脱け殻』で国家と故郷双方を否定的に書くことは、当時のケジラハビにとって最も誠意あることだったのかもしれない。そのように考えると、『蛇の脱け殻』からは、故郷にも国家にも身の置き場がないことを認めるほかなくなった、タンザニアの社会主義時代末期に生きるケジラハビの姿が浮かび上がる。

この時期の他の作家で、このような違和感を表現した人は皆無であると思われる。例

---

<sup>40</sup> Mazrui 1967.

<sup>41</sup> Johnson 2000.

えば、1970年代の文学作品の中に、ウジャマー政策やニエレレ政権に少しでも批判的なものは見当たらない。また、ケジラハビの親友であり詩人の M. Mulokozi は、ある評論でケジラハビの小説のニヒリズムを批判して、社会主義は「混沌ではなく、我々の歴史であり、前進である」と述べる<sup>42</sup>。彼は先述の Gibbe 同様、国家権力の美化に没頭することが可能であった一般的なエリートの一人であったと言え、同じ大学の同僚や親友にさえも理解されないところにケジラハビの孤独もうかがえる。

1970年代末にはその先行きに暗雲が漂っていたウジャマー政策は、経済状況の悪化により、1982年の構造調整政策の受け入れと共に放棄されるに至った。ニエレレは1985年に政策の失敗の責任を取って大統領を辞任した。アフリカ独自の思想に基づく社会主義国家建設の理想はこうして挫折に終わったのである。一方ケジラハビは、『蛇の脱け殻』執筆後すぐにウィスコンシン大学に留学し、帰国後の数年間ダルエスサラーム大学で教えた後、1995年、51歳の時にボツワナ大学に赴任し、現在に至っている。

ウジャマー政策が失敗に終わった後も、ケジラハビはタンザニア国家の理想像や未来像について一切書かないまま、異国の地に移住してしまった。『蛇の脱け殻』で国家とウケレウェを全否定し、そのままタンザニアを離れたケジラハビの失望や幻滅には決定的なものが感じられる。それほどそれらの地から心が離れてしまった原因については推測するほかない。しかし新生国家として世界から期待の眼差しを向けられた時代を知る彼にとって、一時は支持した社会主義の理想の崩壊後、世界経済の潮流の中で最貧国に留まり続けるタンザニアの姿、ニエレレの問題点を忘れたかのように彼を無批判に慕う国民の姿、それもやむを得ないと思えるほどに独裁色を強めるニエレレ後の与党の姿など、その失望の原因は多すぎるほどである。そして、もともと読書に馴染みの薄い社会ゆえに、彼と問題意識を共有し、作家である彼を自分たちの代弁者とみなしてくれるような人々は、ウケレウェの地にも、その他の地にもいなかったのではないだろうか。

タンザニアという祖国とウケレウェという生まれ故郷、二つの「ワタン/Homeland」からみずから距離を置いたケジラハビが心から慕う「ワタン」は、現実世界ではなく個人的な夢想の中だけにあるようである。ケジラハビは故郷の村の名前を冠した望郷の詩を三篇書いている。そのうち、1988年に書かれた二篇目の詩には、故郷に発展が見られないことへの嘆きや自責の念が読み取れるのみであるが、ボツワナ移住後の2008年に書かれた望郷の詩「ナマゴンド III」では、彼は穏やかな調子で故郷の先祖たちに語りか

---

<sup>42</sup> Mulokozi 1983: 11.



けている。

ここで私は最初の息を吸った／そして最後の息もここで吐くだろう（……）／自分のための小さな居場所はすでに頼んである／先祖たちよ 私はペンを持たずに行きます／だから私も輪の中に入れて下さい／背後では土が私の頬にキスをするだろう／私がああ永遠の微笑みを浮かべるまで<sup>43</sup>

「ペンを持たずに」という表現からは、無文字社会に生きた先祖たちの口承文芸の世界に、作家として生きてきた自分を受け入れてほしいという思いが読み取れる。またそこには、エリート意識を抱き執筆活動を行った過去を捨て去ろうとする意識も潜んでいるかもしれない。最終行で、彼を待つ先祖たちというヴィジョンが彼に与えている安らぎは、「ワタン」なるものが人に与え得る安らぎとみなしてもよいだろう。

国家建設への責任感とウケレウエの人々への共感との狭間に立たされ、自分のエリート意識への嫌悪感ゆえに、それらの思いを表現することによって救いを得ることさえもできなかったケジラハビは、国家の現状への失望を機に、国家とウケレウエ双方を否定的に書くことでそれらの地に別れを告げた。そして異郷の地にいるケジラハビが郷愁を覚え、みずからが還る故郷の地として思い描く「ワタン」とは、「祖国」タンザニアでもなければ、同胞が暮らす現実の故郷でもなく、先祖たちの待つ死後の世界なのである。彼にとって心安らぐワタンは、もはやこの地上には存在しないかのように。

#### 参考文献

- Bertoncini, E. Z. (2009) "Chapter Two: Contemporary Prose Fiction, Kenya From the 1960s to the 1980s" in M. D. Gromov, S. A. M. Khamis & K. W. Wamitila (eds.), *Outline of Swahili Literature: Prose Fiction and Drama*. Brill Academic Publishers, 45-53.
- Blommaert, Jan (1999) *State Ideology and Language in Tanzania*. R. Koppe.
- Brennan, James R. (2012) *Taifa: Making Nation and Race in Urban Tanzania*. Ohio University Press.
- Bulcaen, Chris (1997) "The Dialogue of an Author: Kezilahabi's *Kaptula la Marx*" *Swahili Forum*, 4, Institute for African Studies, University of Cologne, 107-115.
- Chambers, Robert (1972) "Book Review: Building Ujamaa Villages in Tanzania" *Taamuli* Vol. 2-2.
- Coulson, Andrew (1982) *Tanzania: A Political Economy*. Clarendon Press.

---

<sup>43</sup> Kezilahabi 2008: 34.

- Garnier, Xavier (2013) *The Swahili Novel: Challenging the Idea of 'Minor Literature'*. James Currey.
- Gibbe, A. G. (1982) "Baadhi ya Taswira katika *Gamba la Nyoka*" *Kiswahili* Vol. 49, No. 1, 9-14.
- Gromov, Mikhail D. (2009) "Contemporary Prose Fiction 2. Tanzania from the 1990 to the Present" in Elena Bertoncini Zubkova, Mikhail D. Gromov, Said A. M. Khamis & Kyallo Wadi Wamitila (eds.), *Outline of Swahili Literature: Prose Fiction and Drama*, Brill Academic Publishers, 125-128.
- Hyden, Goran (1980) *Beyond Ujamaa in Tanzania*. Heinemann Educational Books Ltd.
- Johnson, R. W. (2000) "Nyerere: A Flawed Hero" *The National Interest* Vol. 60, 66-75.
- Kalley, Jacqueline A. & Elna Schoeman, & L. E. Andor (1999) *Southern African Political History: A Chronology of Key Political Events from Independence to Mid-1997*, Greenwood Press.
- Kezilahabi, Euphrase (1974) *Kichomi*, Heinemann Educational Books.
- \_\_\_\_\_ (1976) "Ushairi na Mapokeo na Wakati Ujao" in J. P. Mbonde. *Uandishi wa Tanzania: Kitabu cha Kwanza- Insha*. East African Literature Bureau, 121-137.
- \_\_\_\_\_ (1980) "The Swahili Novel and the Common Man in East Africa" in *The East African Experience: Essays on English and Swahili Literature*, Ed. Ulla Schild, Reimer, 75-84.
- \_\_\_\_\_ (1981) "Ushairi na Nyimbo katika Utamaduni Wetu" in *Urithi wa Utamaduni Wetu*, Eds. C. K. Omari & M. Mvungi, Tanzania Publishing House, 119-137.
- \_\_\_\_\_ (1988) "Ideological and Material Problems in the Production of Swahili Literary Works" *Kiswahili* Vol. 55, No. 1, 36-44.
- \_\_\_\_\_ (2006) *Gamba la Nyoka*. Vide-Muwa Publishers Limited.
- \_\_\_\_\_ (2008) *Dhifa*. Vide-Muwa Publishers Limited.
- \_\_\_\_\_ (2010) *Kaptula la Marx*. Vide-Muwa Publishers Limited.
- Kiango, S. D. & T. S. Y. Sengo. (1972) "Fasihi" *Mulika* 4, 11-17.
- Mazrui, Alamin (2007) *Swahili beyond the Boundaries: Literature, Language and Ideology*. Ohio University Press.
- Mazrui, Ali (1967) "Tanzaphilia" *Transition* No. 31, 20-26.
- Mlacha, S. A. K. & J. S. Madumulla (1991) *Riwaya ya Kiswahili*, Dar es Salaam University Press.
- Mulokozi, M. M. (1983) "Maendeleo na Matatizo ya Uchapishaji wa Vitabu vya Kiswahili" katika *Makala ya Semina Juzuu II. Uandishi na Uchapishaji*, TUKI, Chuo Kikuu cha Dar es Salaam.
- Řehák, Vilém (2007) "Kazimoto and Meursault: 'Brothers' in Despair and Loneliness. Comparing Kezilahabi's *Kichwamaji* and Camus' *L'Étranger*", *Swahili Forum*, 14, Institute for African Studies, University of Cologne, Cologne, 135-151.
- Topan, Farouk M. (1971) "Swahili Literature Plays Major Social Role" *Africa Report* Vol. 16, No. 2.
- \_\_\_\_\_ (2006) "Why Does a Swahili Writer Write? Euphoria, Pain, and Popular Aspirations in Swahili Literature", *Research in African Literatures*, Vol. 37, No. 3, Indiana University Press, Bloomington, 103-119.